マルク・ド・ロ神父による最後の書簡：知られざる平和への懇願

サイモン　ハル

The Last Letter of Father Marc de Rotz: His Unknown ‘Appeal for Peace’

Simon HULL

フランス人宣教師マルク・ド・ロ（1840–1914年）は、長崎においては説明する必要がないほど広く知られた人物である。彼は、パリ外国宣教会（Missions Étrangères de Paris, 以下MEPとする）から派遣されたカトリック宣教師の一人として1868年に日本に到着し[1]、その生涯の40年以上を長崎での布教活動に捧げた。特に長崎・外海地方における地元住民の生活向上を目的とした多くの事業を主導したことが今日でもよく知られている。現在、ユネスコ世界遺産として登録されている３ヶ所（外海の出津集落、外海の大野集落、大浦天主堂）にはド・ロの手がけた建造物が含まれており、代表的な宗教木版画（通称ド・ロ版画）は県指定有形文化財に指定されているものもある[2]。ド・ロは長崎の歴史文化を形成する重要な一部であると同時に、21世紀においても「ド・ロさま」と親しみを込めて呼ばれるほど愛され続けている人物である。

そのド・ロについて、「彼は来日してからほとんど手紙を書かなかった」という説がこれまで広く信じられてきた。この説を覆すことが本稿の目的であり、これまで未見であった書簡のうち、彼が死の数週間前に綴った１通を中心に紹介する。なお、本稿ではド・ロの日本語での名前表記を、従来の「マルコ・マリー・ド・ロ」ではなく、フランス語の発音と表記の慣例に従って「マルク・ド・ロ」とする[3]。

１．ド・ロに関する先行研究

ド・ロは彼の母国フランスではほとんど知られておらず、フランス人研究者からもあまり関心を持たれることなく現在に至っている。日本においては彼に関するさまざまな書籍や記事が出版

[1] 高木一雄によると、ド・ロは1854年の日米和親条約締結後の日本開国から数えて13番目に来日したMEP宣教師である。幕末期に日本の地へ降り立った司祭は彼を含めてたった16名であった。『日本カトリック教会復活史』（教文館, 2008年）439–443頁参照。

[2] 外海町出津のド・ロ神父記念館所蔵の「煉獄の霊魂の救い」、浦頭教会聖教木版画がそれにあたる。詳細についてはhttps://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/taikei_ken.html（2023年11月6日閲覧）を参照。

[3] 例えば、L’Institut de recherche France-Asie（以下 IRFA, 所在地：パリ）の宣教師データベースではミドルネームは省略され、Marc ROTZ（de）となっている。現在 IRFA が MEP 文書館の正式名称である。

されているが、それらの大多数は十分な学術的調査にもとづいたものではなく、どちらかというと一般読者向けの内容にとどまっている。学術文献として存在するもののほとんどは、ド・ロの宣教師としての公の姿や活動、例えば彼の手がけた建築や版画、医療福祉活動等に重点を置いた内容となっている。最新の研究としては、ド・ロ版画をテーマに取り上げた2019年出版のものが一例としてあげられる[4]。

ド・ロの代表的な伝記としては、1977年に刊行された片岡弥吉著の『ある明治の福祉像：ド・ロ神父の生涯』がある[5]。そのほかにも有益な伝記本が出版されてはいるが[6]、後のド･ロ関連文献の多くが同書に依拠していることを考慮すると、これが後世の人々の「ド・ロ神父」理解を形成するのに大きく貢献したといっても過言ではない。同書はまた、ド・ロが地元の人々に当時どのように記憶されていたかを記録している点で貴重であり、彼の生涯を初めて調査研究にもとづいてまとめた草分け的な一冊であることは間違いない。

しかしながら、わたしたちはド・ロの内的世界をほとんど知ることがないまま今日に至っている。この謎の多い宣教師はいったいどういう人物だったのだろうか。遠い異国から来日し、文化や習慣の大きく異なる日本での布教生活で、どのような喜びや悲しみを経験してきたのであろうか。私たちは彼の人となりを記憶や言い伝えを通して時折垣間見ることができるものの、先行研究においては、ド・ロの素顔、つまり彼が実際どういったことを考え、感じていたかについてはほとんど注目されず、明かされてこなかった。本稿が未見の書簡の紹介だけにとどまらず、ド・ロの書き残したものを通して彼の知られざる側面に光を当てる一助ともなれば幸いである。

2．ド・ロに関する新たな一次史料

片岡のド・ロ研究の主な弱点はド・ロの母国であるフランス側の史料をほとんど参照できていないところにある。前掲書において、片岡はパリのMEP文書館にはド・ロによる書簡は３通のみ残されていると述べており[7]、その数が少ない理由を、「故郷を愛する余り、望郷の念の高まるのを恐れて」と推測している[8]。そして、これまで多くの人々がこの主張を受け入れ続けてきた。しかし実際、MEP文書館には、2015年からこれまでの筆者の調査によると少なくともド・ロによる22通の書簡が保管されていることがわかっている[9]。したがって、片岡と当時のMEP文書館の文書係であったジャン・ゲンヌ神父（Jean Guennou, 1915-2002年）との間に誤解が生じてい

[4] 郭南燕『ド・ロ版画の旅：ヨーロッパから 上海～長崎への多文化的融合』（創樹社美術出版, 2019年）。

[5] 片岡弥吉『ある明治の福祉像：ド・ロ神父の生涯』（日本放送出版協会, 1977年）。同書は近年、別タイトルで再版されている。『片岡弥吉全集 別冊 ド・ロ神父：世界遺産出津の福祉像』（智書房, 2019年）。本稿では1977年版に拠った。

[6] 江口源一『ドロさま小伝』（私家版, 1993年）。

[7] 片岡弥吉『ある明治の福祉像』16頁および228頁を参照。ただし16頁の４通は誤りのようである。228頁で片岡はMEP文書館には（４通ではなく）３通のみしか見つかっていないことを明記しているからである。

[8] 前掲書, 225頁。ただし、片岡は16頁において、外海町の高齢のシスターも同じ見方をしていることに言及している。

[9] これらはIRFA内の日本関連の３冊（vols. 569-571）とド・ロ関連（no. 2878）に保管されている。

たか、あるいは片岡が不正確な情報を与えられたかのどちらかであったと推測される[10]。片岡が訪れた当時、文書館は一般公開されておらず[11]、現在ほど整理や保管体制が整っていなかったため、後者の可能性が高いと思われる。以上のような理由から、1970年代当時の状況で可能なところまで調査が行われたと考えるのが適切であろう。

次節では、これまでほぼ未見であった19通のうちの１通を詳しく見ていくのだが、興味深いことに、残りの18通のうち、13通に関しては、ある一連の問題について２年余りの期間（1878年８月～1880年12月）[12]にまとめて書かれたものである。ここで簡単ではあるがその概要に触れておく。ド・ロの見解によると、それらの問題は、a）かつて潜伏キリシタンであった数多くの信者が、カトリック信仰とは相容れないと彼が見なした土着の信仰と習慣の多くを維持したままであること、b）かつての潜伏キリシタンたちが授かった洗礼の大半に問題があり、秘跡的に疑わしいか、あるいは無効であること、c）結婚についても同様で、秘跡的に疑わしいか、あるいは無効であるものが多数あること、である。これら13通の書簡は、上記のような非常に複雑で扱いの難しい問題をどう対処すべきかで、ド・ロが深く悩み苦しんでいたことをあらわにしている。

また、MEPの文書館はド･ロの手によるもの、あるいはド･ロが草稿を手伝った（書簡以外の）文書も存在する[13]。それらは、上述と同様の問題に関するもので、13通の書簡と同時期に作成されている。例として、各地のかつての潜伏キリシタンたちが授かった洗礼が有効であるかどうかを、ド・ロがまとめた一覧表があげられる[14]。この一覧から、およそ100の地域で執り行われた洗礼が、ド・ロの判断によると無効（五島列島の鯛の浦など）、疑わしいものであり（神の島など）、外海の黒崎などのたった14地域での洗礼のみが有効であったことを知ることができる。まだ司牧環境も不安定ななかで、多くの地域での洗礼に問題があることが発覚し、他にも早急に解決しなければならない問題が山積していた当時の状況を考えると、信者を導く立場の一司祭としての苦悩は想像に難くない。

最後に、他のMEP宣教師たちの手による、ド・ロに言及した書簡も存在することを付け加えておく。同志の宣教師たちが、書簡上でド・ロをどのように伝えているかという観点からの研究調査は、何千もの手書きの文書を注意深く調査しなければならないこともあり、未だ成されていない。

---

[10] 過去に文書係であったアドリアン･ローネー神父（Adrien Launay, 1853-1927年）が作成した目録に、22通のド･ロ書簡のうちの大多数が記載されていることからも、片岡が訪れた当時、これらの書簡が既に文書館内に存在していたことに疑いの余地はない。

[11] Jean-Pierre Lehmann, 'French Catholic Missionaries in Japan in the Bakumatsu and Early Meiji Periods', *Modern Asian Studies* 13, no. 3 (July 1979): 390n46を参照。

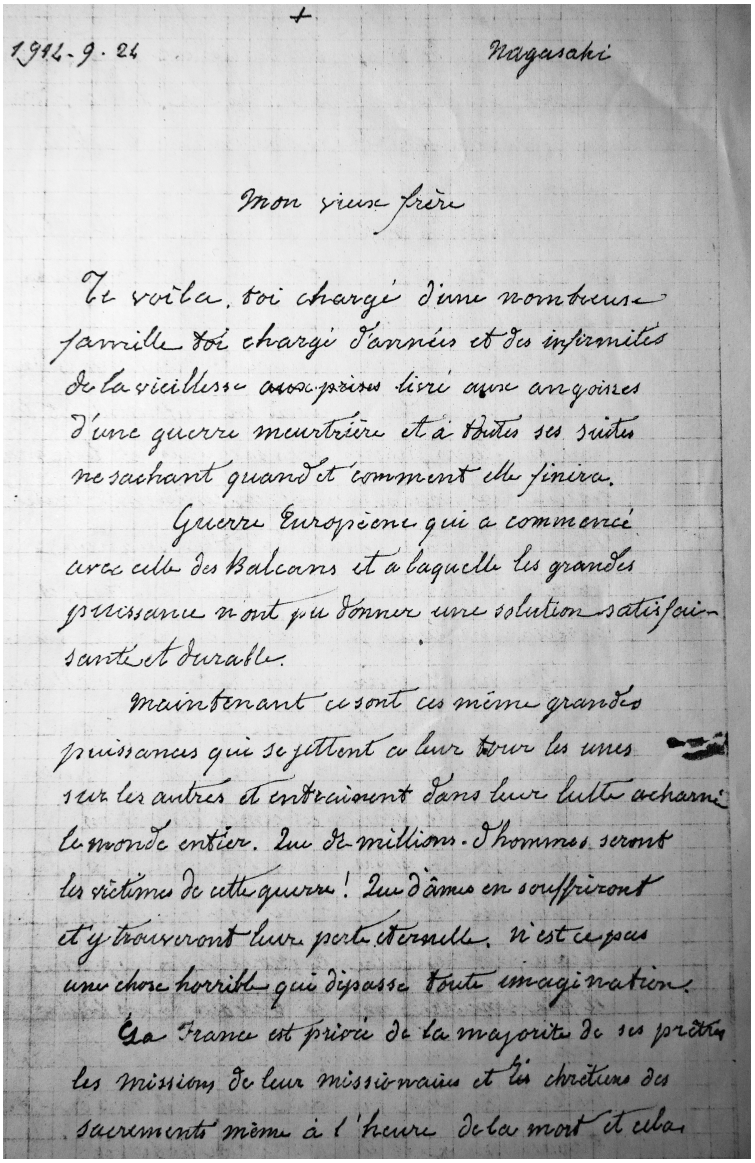
[12] 2022年、浦上キリシタン資料館でこれらの書簡のいくかを取り上げた講座が開講されていたことを後に知ったが、講座内容を伝えるチラシでは1878年から1882年の間にド・ロが遺した書簡はMEP文書館で12通確認されたと記載があった。しかし正確には少なくとも14通存在する。

[13] 重要な史料のうちの一つに関する考察は、マルタン・ノゲラ・ラモス「長崎地方におけるカトリック信徒・非カトリック信徒関係の諸相―『日本習俗に関するロケーニュ師の手記』（一八八〇年頃）を中心に」大橋幸泰（編）『近世日本のキリシタンと異文化交流』（勉誠社, 2023年）228-251頁を参照。

[14] これらの２枚からなる一覧表は、IRFAド・ロ関連（no. 2878）に保管されている。

3．ド・ロによる最後の書簡

ド・ロの亡くなる1914年11月７日から数えてわずか数週間前の同年９月24日、彼はフランスにいる兄に宛てて書簡をしたためている[15]。「僕のなつかしの兄さんへ」とだけ記してあるが、これは間違いなく彼の兄であるオリヴィエ・ド・ロへ宛てたものである。筆者の調べたところによると、オリヴィエは1838年に生まれ、３人の子をもうけている。知る限りでは、ド・ロの兄弟のな



1914-9-24　Nagasaki

Mon vieux frère

Te voilà, toi chargé d'une nombreuse famille toi chargé d'années et des infirmités de la vieillesse ~~aux prises~~ livré aux angoisses d'une guerre meurtrière et à toutes ses suites ne sachant quand et comment elle finira.

Guerre Européenne qui a commencé avec celle des Balcans et à laquelle les grandes puissances n'ont pu donner une solution satisfaisante et durable.

Maintenant ce sont ces même grandes puissances qui se jettent en leur tour les unes sur les autres et entraînent dans leur lutte acharnée le monde entier. Que de millions d'hommes seront les victimes de cette guerre! Que d'âmes en souffriront et y trouveront leur perte éternelle. Il est en ~~pas~~ une chose horrible qui dépasse toute imagination.

La France est privée de la majorité de ses prêtres les missions de leur missionnaires et les chrétiens des sacrements même à l'heure de la mort et cela

図１．ド・ロによる最後の書簡 冒頭部分　　© L'Institut de recherche France-Asie

[15] IRFAド・ロ関連（no. 2878），マルク・ド・ロ書簡 オリヴィエ・ド・ロ宛 1914年９月24日付

かで1914年まで生存していたのはオリヴィエだけであったことからも、ほぼ確実であろう。長さおよそ３ページ強のこの書簡は、複写されたものが現在MEP文書館に保管されている。原本についての所在は調査中で憶測の域を出ていないが、オリヴィエの子孫が所有していて、ある時点でコピーしたものをMEP文書館に寄贈したというのがもっともらしい。

この書簡の日付からも明らかなように、書かれたのは欧州で第一次世界大戦が勃発した直後のことである。言うまでもなく、「これが絶対的にド・ロの手による最後の書簡である」と断言することは不可能であるが、本稿ではあえてそのように扱っている。その理由としては、a）筆者の知る限りにおいて、ド・ロ神父の晩年の書簡のうちで、これほど死期の近くに書かれたものが今のところ発見されていないこと、b）彼がこの時点でかなり衰弱していることから、現実的に考えても最後の書簡である可能性が著しく高いこと、などがあげられる。

以下、書簡の内容を要約し、主要部分を邦訳して掲載する。続いて、ド・ロの神学的思考に特に焦点を当てて内容分析し、最後に書簡の意義をまとめている。なお、ド・ロの句読点の使い方が不規則で、直訳ではわかりにくい部分があるため、コンマを適宜挿入して翻訳している。

（1）書簡の部分訳と要旨

ド・ロは、年老いた兄が直面する状況に同情の意を表明することから始めている。

> *Te voilà, toi chargé d'une nombreuse famille, toi chargé d'années et des infirmités de la vieillesse aux prises, livré aux angoisses d'une guerre meurtrière et à toutes ses suites, ne sachant quand et comment elle finira.*
>
> ああ、兄さん、そこであなたは大家族を抱え、歳月の重荷と老いの病を背負い、いつ、どのように終結するかもわからない人殺しの戦争とそのすべての影響がもたらす苦悩の渦中にいるのだろうね。

そして「列強」が「バルカン半島から始まった欧州の戦争」にうまく決着をつけることができなかったことを指摘し、こう続けている。

> *Maintenant ce sont ces mêmes grandes puissances qui se jettent à leur tour les unes sur les autres et entraînent dans leur lutte acharnée le monde entier. Que des millions d'hommes seront les victimes de cette guerre! Que d'âmes en souffriront et y trouveront leur perte éternelle, n'est-ce pas une chose horrible qui dépasse toute imagination.*
>
> そして今、同じ列強の国々が、今度は互いを攻撃しはじめ、世界全体を壮絶な戦いへと引きずり込んでいる。何百万人もの人々がこの戦争の犠牲になることだろう！そのなかでどれだけの霊魂が苦しみ、永遠に失われることになるのだろう［つまり、戦

争によって人々が悪に染まり、救いの道を絶たれて地獄に堕ちるということ]、それはあらゆる想像を超えた恐ろしいことではないか。

カトリック司祭として、ド・ロはこの戦争が、母国フランスと、フランス人宣教師が司牧を一任している日本のような国々のキリスト教信者に、どう影響するかを特に気にかけている。「フランスは司祭の大半を、宣教地は宣教師を、信者は死の間際の秘跡でさえ、奪われているのだ」[16]とあり、現行の司祭や宣教師たちが殺されてしまえば、すぐに代務する者を充てるのは難しく、それは多くの信者たちがいつまでも秘跡を受けられない状態になることを意味すると語っている。

さらに、この戦争の根本的な原因と思われることについて以下のように指摘する。

Le monde, ayant abandonné Dieu et l'église, est devenu habile dans l'art de tuer vite et en grand nombre et de multiplier les morts. Tout cela n'est pas l'œuvre de Dieu mais de son ennemi.

世界が神と教会を捨て去ってしまったがために、すばやく大量に殺し、死者を何倍にも増加させる技術に長けてきている。これらすべては神のわざではなく、彼の敵[＝サタン]のなすわざなのだ[17]。

ド・ロはカトリック神学の視点から戦争を理解し、「苦しむことになる」悪人と、「祈りや犠牲、その死によって…私たちを救う」善人とを明確に区別している。彼はまた、善良な者は、「彼らの受ける苦しみのすべてを、全人類の救いのために十字架上で亡くなられた我らの主の苦しみと一つにし」、彼らが天の国で「冠」（つまり報いのこと）を受けると綴っている。

さらに、この戦争においてフランスは神の援助を受けているが、ドイツはそうでないことを示唆している。世界は神を捨てたが、神は、フランスの人々が自らの罪を告白し、神のもとに立ち返るように、恵みを与えてくださるだろうとも推測している。ド・ロはいうまでもなく母国フランスを支持する立場にあり、フランスは神にとって特別であると信じながらも、すべての人間がキリストに立ち返る必要性を強調している。そして彼の兄に以下のように促している。

Prie bien pour la conversion de nos alliés et même pour celle de nos ennemi et Dieu les convertira. Aucune prière ne vaut plus que celle qui est faite pour son

[16] 何万人ものフランス人カトリック司祭や神学生が戦争に動員され、かなりの数が命を落としている。MEP宣教師たちについても同様で、多くの若い宣教師が召集命令を受けて布教先からヨーロッパへ呼び戻された。その中には、日本で活動していたド・ロの同志も含まれている。詳細についてはPaul Christophe, *Des missionnaires plongés dans la Grande Guerre 1914-1918: Lettres des Missions étrangères de Paris*（Paris: Les Éditions du Cerf, 2012）を参照。

[17] ド・ロは第一次世界大戦のような殺人的な戦争を「サタンのなすわざ」としているが、1981年２月25日広島でヨハネ・パウロ二世が『平和アピール』で述べた「戦争は人間のしわざ」と比較すると興味深い。双方ともに神のなすわざではないことを強調しているところに共通点がある。

ennemi, notre Seigneur a terminé sa vie sur la croix en la faisant.

私たちの同盟国と、さらには敵［ドイツのことか］の回心のためにもよく祈ってください、そうすれば神が彼らを回心させてくださるでしょう。我らの主が十字架上で息を引き取られたときにされたように、敵のために祈ることほど尊いことはないのだから。

書簡の最後は、いくつかの結びのことばで締めくくられている。ド・ロは彼の兄が個人的には返事を出せないかもしれないことを理解しつつ、彼の秘書が返信を手助けしてくれることを望んでいると記している。そして以下のように自身の健康状態についても触れている。

J'ai été éprouvé par les chaleurs extraordinaires de cet été. Je ne suis pas fort, tout au contraire je souffre, perds le peu de forces qui me restent à la garde de Dieu.

この夏の異常な暑さにやられてしまったようだよ。もう自分は強くはなく、それどころか苦しんでいるよ、残されたわずかな力すら失いつつある、神に見守られながら。

ド・ロは自分が思っていたよりも兄に宛てて手紙を書くのが遅くなってしまったことを暗に示しながらも、それでも彼の愛する兄弟に「私の心は兄さんのことを忘れてはいないよ。兄さんと家族みんなの苦悩を思って苦しんでいるのだから」（*mon coeur ne t'oublie pas car je souffre en pensant à tes angoisses et à celles de toute la famille.*）と強く訴えかけている。神に「皆に祝福がありますように」、「私たちを憐れみ給え」と願い、最後にフランスへの愛国的な短い一節でこの手紙を結んでいる。

(2) 書簡の神学的内容の分析

ド・ロの生まれ育った19世紀フランスでは、カトリックを信仰する者にとって「四終」（*les quatre fins dernières*）といわれる、すなわち「死」「審判」「天国」「地獄」が特に重要視されることが一般的であった。

目の覚めるような色使いで視覚的に強い印象を与える一連のド・ロ版画で、彼の持つ「四終」思想が十分に示されているように、ド・ロは悪魔（サタン）の力がこの世で常に働いていることを敏感にとらえ、「地獄」行きは人間の死後、実際に起こりうることであると深く信じていた。例えば、ド・ロ版画の一つである「悪人の最期」で、恐れおののいた男が、無力にも嘆き悲しむ天使に見つめられながら首をつながれて地獄にひかれていく様子が描かれていることにも納得がいく。ド・ロのこういった世界観は、死の直前に書かれた当書簡の内容にも色濃く反映されている。

ここで強調しておくべきは、カトリック神学において、「地獄」とは、死後に受ける自らが招いた罰であり、そこからは決して逃れることができないものと理解されている点である。言い換

えると、地獄に堕ちた者は、救いの希望のない永遠の苦しみを受けることとなるのである。さらに、地獄での苦しみは、そこで最も小さなものでも、この世の何倍も惨く苦しいものであるとされている[18]。そのため、戦争によってこの世で人々が苦しむことだけでなく、それ以上に、どれだけ多くの人々が戦争によって地獄に堕ちてしまうのかということを、ド・ロは特に憂慮していたようである。カトリック司祭の立場からみた戦争の最も邪悪な点は、非常に多くの霊魂を地獄への危険にさらすことであり、彼はそれを「あらゆる想像を超えた恐ろしいこと」として表現している。

そのため、ここでのド・ロの核心となる主張は、一刻も早い回心の必要性であり[19]、一つでも多くの霊魂が地獄の業火から救われるように、敵のために祈ることの必要性も同時に強調しているのである。

「回心」でド・ロが意味しているのは、愚かな戦争など放棄して、カトリック信者として聖なる生活を送り、教会の教えに従って生きることである。洗礼を受けたすべてのカトリック信者で大罪を犯した者は、心から悔い改め、できるだけ早い機会にゆるしの秘跡を受けなければならない。すなわち、司祭へ罪を告白することである。カトリック信者でない者についても、罪の悔い改めをし、未受洗の場合は有効な洗礼を受けてカトリック信者になるよう招かれている。

「四終」については、第二バチカン公会議（1962-1965年）以降、今日のカトリック教会ではあまり強調されることはなくなってしまったが、現代でもその教えが変わったわけではない。

今日、ド・ロがあたかも私たちと同じような思考で生きていたかのように単純に考えてしまいがちだが、彼は飽くまで19世紀に生きた司祭として世界をとらえていたことを忘れてはいけない。基本的なことではあるが、ド・ロを含めた当時のフランス人宣教師の神学的思考を以て文脈をとらえることで、書簡の内容理解が大きく変わることはいうまでもないだろう。

(3) 書簡の意義

当書簡が注目に値する理由の一つとして、ド・ロの伝記的研究に新たな光を投げかける内容を含んでいることがあげられる。これまで、ド・ロの死の直前の心境を知ることができる史料は取り上げられることがなかった。祖国での戦争勃発という唐突な知らせと、それによって家族の命が危険にさらされているという現実に打ちのめされ、心痛のうちに死を迎えなければならない心境があらわにされている。また、彼は当時74歳であり、健康状態がますます悪化している状況で書かれたことも、書簡の哀感を強めている。ド・ロの身体的な衰弱は、筆跡にも顕著に現れている。彼の若い頃の書簡の筆跡と比べると、かなり弱々しくなり、全体的に震えがみられるのである。書くという行為さえ難しくなっても、「残されたわずかな力」をふりしぼって、およそ半世

[18] 聖トマス・アクィナスは、煉獄での苦しみで最も小さなものでさえ、現世のすべての苦しみを凌ぐとしている（*Summa Theologiae*, Suppl., app. 1, q. 2, a. 1）。霊魂が清められたのちに天国行きが許されるとされる希望の残された場所での苦しみがこれほど凄惨なものであるならば、地獄での苦しみが私たちの想像を絶するものであることはいうまでもない。

[19] カトリックの教義では、悔い改めは生きている間にだけ可能であり、死後にはできないため「一刻も早く」行わなくてはならないと考えられている。

紀会うことのかなわなかった、そしてこの世でも二度と会うことはない実兄への思いを綴っている[20]。

また同時に、ド・ロは最後の力を使って、震えのある疲れ果てた手とは対照的に、考えられる限りの強い言葉を以て近代的な戦争の恐ろしさを非難しているのである。ここで、当書簡が他史料と一線を画しているもう一つの理由の核心に触れたい。つまり、当書簡の記された時期、記された場所、書き手の組み合わせである。

記された時期と場所に関していうと、長崎の地からこれまで発信されたなかでも最も早い「平和アピール」の一つであることに間違いないだろう。1945年８月に被爆地となる以前に、長崎からこれほど強い言葉で戦争を非難した例が、他にどれだけ存在するだろうか。ド・ロが文中で、世界は「すばやく大量に殺し、死者を何倍にも増加させる技術に長けてきている」と警告した一文は私たちの背筋を凍らせるものがある。当時はまだ存在していなかった核兵器の悪をも的確に言い当てており、この書簡から約30年後の長崎にもたらされた恐怖を想起させるものである。多くの人々が気づく前に、ド・ロは人類が悲劇的な方向に向かっていることを正しく予見していたのである。

書き手については言うまでもないが、長崎の人々と深い絆を築きあげ、今でも敬愛され続けている、他ならぬ「ド・ロさま」によって書かれたことは、特別な意味を付加するものであると考える。今日まで未見であったという事実も、当書簡の印象をより強いものにしている。ド・ロの最期のメッセージとしてとらえることもできる「人類は戦争を拒否するべきである」という彼の願いと、今日の長崎の人々が持つ平和への願いとがぴったりと一致していることも見逃せない。そういった意味でも特異な位置にあり、現代の私たちの心にも訴えかける当書簡は、知られざる長崎の文化遺産の貴重な一片といえるのではないだろうか。

４．おわりに

1914年11月15日、当時長崎の司教であったコンバス（Jean-Claude Combaz, 1856-1926年）はド・ロの兄オリヴィエに弟の死を伝える書状を送っている[21]。この書簡についてもこれまで未見のまま触れられてこなかった。コンバスはド・ロの死に立ち会ったのであるが、彼はド・ロの最期のときを、「まるで、オイル切れのランプのように、彼はやすらかに逝った」（*Le Père s'éteignit doucement comme une lampe manquant d'huile*）と記し、また「この恐ろしい戦争の…知らせは…彼の繊細な心をかき乱し、彼の目に涙をもたらした」（*Les nouvelles…de cette guerre effroyable…affectaient son cœur sensible et lui arrachaient des larmes*）と伝えている。コンバスのこ

[20] 1868年にフランスを離れてから、ド・ロは祖国へは一度も帰っていないと考えられている。1914年の時点で、半世紀のあいだ兄弟が再会する機会はなかったということになる。オリヴィエがアジアを訪れたことを示す記録は残されていない。

[21] IRFAド・ロ関連（no. 2878），ジャン=クロード・コンバス書簡 オリヴィエ・ド・ロ宛 1914年11月15日付。なお、当書簡の宛名については明記されていないが、オリヴィエ宛であることが明らかであることから以上のように記載している。

れらの痛切な表現から、ここでも死を前にして深く苦しんでいたド・ロの姿がうかがえる。

上記のコンバスによる書簡を含め、本稿で取り上げてきた新史料が示すように、ド・ロに関する新たな研究が必要であることは明らかである。これまでの研究者たちがフランス語史料をほとんど見落としてきたために、先行研究から得られるド・ロの人物像は不完全な状態であると言わざるを得ない。片岡弥吉によるド・ロの伝記が出版されて以降、片岡自身は自分の著作がさらなる研究への道を開ければと望んでいたようであるが[22]、これ以上新たに言えることはないと考える研究者もいるようである。また本稿の１．でも言及したように、既存の研究はド・ロ版画をはじめとした宣教師としての活動にのみに重点が置かれている傾向にある。そのため、ド・ロの伝記的研究の必要性を感じ、現在、フランス語史料の綿密な調査を一部に取り入れた新たなド・ロの伝記の執筆に取り組んでいる。今後の研究目標は、新たな史料にもとづいて、彼の内的世界のベールを剥ぎ、これまで部分的にしか明かされていなかったド・ロの人物像をより完全なものに近づけることである。

長崎では19世紀半ばから、MEPだけでなく、数多くのキリスト教宣教師たちが活動するようになった。しかし、幕末時代以後に活躍したなかで、マルク・ド・ロ神父ほど地元民の心をつかむような宣教師は他にいないのではないだろうか。こういった観点からも、ド・ロ再考が求められると考えている。

（2023年11月22日受理）

[22] 矢野道子『ド・ロ神父黒革の日日録』（長崎文献社, 2006年）178頁。